

和のある暮らしのカタチ展 1/19[金]~21[日]

会場:リビングデザインセンターOZONE



うるおし  
TAKAOKA PRODUCTS

美しい艶としっとりとした表情を持つ漆の語源は、「潤し(うるおし)」だといふ。

高岡市デザイン・工芸センターでは、この漆の新しい可能性を求めて、平成16年度より新クラフト産業・デザイン育成事業「うるおしプロジェクト」に取り組んできた。

プロジェクトが注目したのは、京都市産業技術研究所が開発した耐熱・耐候性に優れたMR漆、LTH漆である。まず、この耐熱・耐候性漆の性能実験を行い、高付加価値製品への可能性について研究。さらに、その成果をもとに、プロダクトデザイナー、流通コーディネーターを交えた製品開発を行うこととした。

平成16年度は、技術アドバイザーの才川真一さんの指導のもと、耐熱・耐候性漆の各種塗布方法、塗膜実験を行った。耐候性試験では、屋外に2ヶ月間放置し、塗膜の状態を調査。MR漆は、塗膜面が白くかすんだ状態ではあるが、表面の艶、光沢は保たれていた。耐水性試験でも十分な性能が確認できた。

この結果を受けて、平成17年度は屋外での使用を試みる漆看板グループと、水回り製品開発グループとに分かれて研究を進めた。

漆の高付加価値製品をめざして

漆看板グループは、市内漆器メーカー・問屋を中心とした12社が参加。土蔵造りの家が残る高岡市の古い町並みに設置することとした。

ひとつは、「高岡市土蔵造りのまち資料館」の看板。MR漆塗り、高岡漆器の彫刻塗りの技法を使い、小さな文字には青貝(螺鈿)を施した。もうひとつは一般商店の看板で、こちらは漆塗りとした。平成18年4月に設置されたが、約1年経過した現在、さらに味わいを増し、観光客に伝統技術が息づくまちを印象づけている。

一方、水回り製品開発グループは、東京生活研究所ディレクター山田節子さん、プロダクトデザイナー安次富隆さんの指導を受けながら、市内漆器関連企業9社が参加して進められた。

第1回会議で、テーマを「水回り製品の開発」と決定し、それぞれが試作品を制作。石けん入れ、トレイ、花器などが提案された。漆の色がさまざまだったため、第2回会議では、安次富さんのアドバイスにより、テーマカラーを赤、白、黒に限定。これにより、イメージの統一を図り、モダンなテイストとなった。

その後も、何度も会議を行い、サイズ、形、仕上げなどを検討。修正を重ね、水回り製品「うるおし」が生まれた。



水回り製品開発グループによる赤・白・黒のシリーズ



うるおし  
TAKAOKA PRODUCTS

### 溜塗絵箱

デザイン・蒔絵／小杉 かん子  
制作／木地：金場 正一 塗り：斉藤 慎二



### うるし鏡

デザイン・布ボーチ制作／才高 庸子  
制作／木地：内田 和弘 塗り：宮下 勉

うるおしは…

うるし＝うるおす

みずみずしい＝生活を潤す

…というコンセプトのもとに、

今のライフスタイルを

豊かに演出する

新たな塗りモノの

ブランドを目指します。



### もてなし膳

デザイン・ガラス制作／多喜 かおる  
制作／木地：駒井 勝利 塗り：源 謙次

## クラフトウーマンとのコラボレーション

「うるおし」は、漆の語源から安次富さんが命名したのだが、ここには「生活を潤す」というコンセプトがこめられている。

平成18年度は、このコンセプトのもと前年の成果からさらに可能性を求め、地元の女性クリエーターとのコラボレーションに取り組んだ。

これは、つくり手だけで考えていた商品開発に使い手としての若い女性の視点を入れることで、より「生活を潤す」商品をつくらうというものである。また、中央のデザイナーではなく、地域で活躍する漆業界以外のクリエーターに参加してもらうことで、地場産業と関わりが生まれるという効果も期待した。

プロジェクトは、3人のクラフトウーマンの参加を得た。陶芸の小杉かん子さん、ガラスの多喜かおるさん、布雑貨の才高庸子さん。それぞれ、自分たちが魅力を感じる漆製品のデザインに取り組んだ。



山田節子さん

彼女たちが描いたデザインを形にするのは、メンバーの技術者たちである。初回の試作で、螺鈿の引き出し、漆ミニボックス、小物入れができあがったが、講師の指導を受け、それぞれ自分の作品とコラボレートさせることになった。

会議が終わると試作に取りかかる。その繰り返しである。小杉さんは、陶器ではできない細い脚の付いた小箱に絵を描く、多喜さんは漆とガラスの器の膳、才高さんは漆の鏡と、同じイラストを入れた布のボーチを合わせた。

塗りが終わった小箱があまりに完成されているため、絵が描けないと悩む小杉さんに、講師が「見えないところに凝るとい手法もある」とアドバイス。



うるおしプロジェクトの参加者  
前列左から、日野明子さん、安次富隆さん

蒔絵と螺鈿で描いた魚とサンゴは、内箱に美しく漂うことになった。

2007年1月19日から21日、新宿で開催された「和のある暮らしのカタチ展」に、「うるおし」は出展された。

すでに一流デパートやセレクトショップなどからの問い合わせがあり、今後の展開が期待される。

「このプロジェクトのおかげで、いろいろな経験や出会いをもらいました」と小杉さん。才高さんは、「ずっと一人でつくってきた、共同制作は初めてでした。次につながる商品をつくっていきたいと思います」と言う。多喜さんは、「ものができたときが、プロジェクトの始まり。漆を知って、いろいろと広がっていきと思います」と語る。

地域のクリエーターとのコラボレーションは、産地に期待以上の影響を与えていくかもしれない。

メンバーも、「仕事の進め方など、これまでと違って、とても勉強になった」「感性とアイデアが新鮮だった。自分が想像できないようなものができたとと思う」と言う。

まだコストや流通など商品化に関する課題があるが、いろいろな人に高岡からの「うるおし」が届き、暮らしと心をうるおしていく日も近いだろう。